

大東亜戦争（日支戦争・対英米戦争の8年戦争）の真実

（第6回：補足回）戦前日本の「右翼」とは、実は「反・資本主義」「統制経済／計画経済への日本改造」を標榜する「左翼」の偽装団体であった！

【本編論考に関する注意書き】

□ 内：中川八洋 筑波大学名誉教授の著作からそのまま引用した部分。著作名、引用頁等は最下部に明示。

ただし、抜粋部冒頭の表題は、ブログ構成の都合上、私〔=ブログ作成者〕が付させて頂いた。

□ 内：中川八洋 筑波大学名誉教授の著作の要旨を変えずに、私〔=ブログ作成者〕が短く簡明に再構成したか、他の資料によって著作内容の補足をした部分。

□ 内の、() 書き・色文字：私〔=ブログ作成者〕の補足、
[] 書き・傍点・アンダーラインその他すべて：著者 中川八洋による。

〔5〕 全体主義か、自由主義か？---戦前の「右翼」も「左翼」も全体主義を標榜したことにおいて「同族」であった。

〔5〕 -1 「右翼とは共産分子」

ヒトラーの**ナチス党**は、ドイツ語で National Sozialistische Deutsche Arbeiter-Partei といい、翻訳すれば「国家〔民族〕**社会主義**労働者党」（傍点著者、以下同じ）である。あくまでも**社会主義**を前面に**標榜**し、資本主義排撃を綱領とする、下層階級の救済を主眼とする政党である。だから、**マルクス・レーニン主義**を基盤とした主義主張を同じくする**ドイツ共産党**とこの下層階級の支持をめぐる**激越な競争・闘争**が不可避となったのである。

ナチス党と**ドイツ共産党**の死闘は、1960年代に、同じ**マルクス・レーニン主義**の**信徒**でありながら反目しあう**日本共産党**と**全共闘**の各セクトの対立関係と同一である。あるいは、**日本共産党**と**袂**^{たもと}をわかつ同志でありながら、死闘を繰り広げる**全共闘**系の**革マル派**と**中核派**の〔かつての〕**「内ゲバ」**の基本構図と一緒である。

ナチス党が「**右翼**」もしくは「**極右**」とされ、**ドイツ共産党**が「**左翼**」もしくは「**極左**」とされるのは、**ナチス**は**ユートピア**を「**ドイツ千年王国**」という純潔の**ドイツ民族**からなる**コミュニオン**〔**共産社会**〕におき、一方の**共産党**は**共産主義者**からなる**コミュニオン**を**ユートピア**とした、この相異をもって名付けられたにすぎない。

しかし、**民族主義**か否かで、**広義**の**マルクス・レーニン主義者**を**右**と**左**に2方的に分類するのは妥当であろうか。

とくに、**独裁の社会主義〔共産主義〕政党**は必ずや**民族主義的な衣裳**を戦術的に**着る**のであって、それは**マルクス・レーニン主義**の「**正統〔総本山〕**」を自認する**ロシア共産党**とて例外ではない。

残忍苛烈な最悪の**共産主義者スターリン**も、1941年6月の**ドイツ**の侵攻とともに、「プロレタリアートは祖国を持たない」〔『共産党宣言』〕の教義に従いポーダレス〔無国境〕**であるべきソヴィエト**を、**逆さ**にして「**祖国**」と呼び、「宗教は阿片^{あへん}」だから**根絶すべき**ものであるのにロシア正教を**復活**させ**総動員**したばかりか、ポーランドに占領されたモスクワを奪還した**ボジャルスキー**、トルコに侵略し領土奪還に貢献した名将**スヴォーロフ**、ナポレオンの侵攻軍をボロディノで迎え撃った老将**クトゥーゾフ**らの**ロシア民族**の英雄を**大キャンペーン**して抗戦の昂揚に努めた。**スターリン**の「**民族主義**」と**ヒトラー**の「**民族主義**」に**何らの差異はない**。

それぞれ、対独戦のため、共産党に対する権力闘争のため、であり、いずれも“戦術的”であったことにおいて一致した共通性がある。

共産主義者の「民族主義」は、**中国共産党の毛沢東**、**ベトナム共産党のホー・チ・ミン**、**ユーゴ共産党のチトー**などで明らかなように、ほぼ**普遍的な現象**である。つまり、**民族主義的か否か**は「**右翼**」か「**左翼**」かの指標としては**客観性を欠き適切ではない**。

やはり、**社会主義**〔**共産主義**〕**体制**を信条とするか**自由主義体制**を信条とするかの**2分法**しか、21世紀の人類を苛んだ思想状況を正確に分類する物差しはない。

戦後日本では、**社会主義**〔**共産主義**〕**体制**を支持するほうを「**革新**」といい、**自由主義体制**を支持するほうを「**保守**」とした。つまり、「**保守**」か「**革新**」かの**2分法**である。

ただ、ややこしいのは、「**右翼**」か「**左翼**」かの分類と、「**保守**」か「**革新**」かの分類が**一致しない**ことにある。

「**左翼 = 革新**」はそのとおりだが、「**右翼 = 保守**」とは**ならない**からである。
〔拙著『山本五十六の大罪』第二部〕。

たとえば、先述の**ヒットラー**の**ナチス党**についていえば、これを「**右翼**」とするのは**事実を歪曲する**。**社会主義政党**である以上、やはり「**左翼**」と**分類し直すのが正しい**。

ワイマール憲法の**ドイツ**下では**社会民主党**、**ドイツ共産党**、**ナチス党**の**3つ**の「**極左翼**」〔**社会主義**・**共産主義**〕**政党**が**三つ巴**で**権力を争った**のである。

以上のことは、日本にもぴったりあてはまる。

〔**吉田茂**が事実上代筆した〕**近衛文麿**の終戦時の上奏文にある「**右翼者流**なるも・・・**共産分子**なり」は見事な表現である。日本の**帝国陸軍**は、1929年の

ウォール街の株の暴落に始まる世界恐慌以来、マルクスとレーニンに傾倒していった。

1930年以降は、彼らはサーベルを日本刀に替えたり、軍隊をもって「**皇軍**」、国土をもって「**皇土**」、昭和時代を「**昭和聖代**」などと神がかり的にあらん限りに民族主義的な色彩の**衣裳**を次々に重ね着していったが、それは度合いを強めていった**マルクス・レーニン主義**の**信仰を隠すため**であった。

彼らは**マルクス・レーニン主義**を「**日本主義**」「**国家主義**」の**衣裳**で顕現したのである。

ちなみに、「左右の全体主義を排す」という言葉があるが、**保守主義**〔**真正自由主義**〕とは**反・全体主義**の**思想**であって、一方の**全体主義**は「**左翼**」でしか**生じない**。つまり、「左右の・・・」の「右」は**形容矛盾**であり、削除して「**左翼の全体主義を排す**」と**正しく表現すべき**である。

現に、1930年代以降の**ヒトラー・ドイツ**も日本も、**レーニン**の**共産ロシア**と同じく、**社会主義イデオロギー**において生じた**全体主義**〔**ファシズム**〕であって「**左翼**」と分類するしかない。つまり、**フランス革命**以来、「**左翼全体主義**」しか**現実的にも実在しないし、理論的にも成り立たない**。

〔5〕-2 兄弟であった陸軍エリートと日本共産党

帝国陸軍の社会主義化・共産主義化はひどく、敗戦でそれが解体されるやこれらの陸軍のエリート将校が大挙して日本共産党に入党したように、1940年代に入ると、ともに日本の社会主義化／東アジアの社会主義化を理念として、帝国陸軍の中核〔主流〕と日本共産党とのあいだには、差異はほとんどなくなっていた。

・・・1934年ごろからは、ソ連批判や反ソ的な出版のほうがかたがたく取り締まられた。林銑十郎〔1937年首相、1932年～1934年陸軍大臣、陸軍大将〕の著『興亜の理念』すら改定〔反ソ部分の削除〕を命じられている。

1945年4月の吉田茂の検挙拘禁も、その親英米性や対英米和平の動きでの反ソ姿勢が、親ソ一辺倒の「共産主義団体」陸軍の許容範囲を超えたためである。

1930年以降の日本には、思想的な自由主義者は、大学はむろん、官僚であれ軍人であれ政治家であれ、きわめて少数で、その対極の社会主義〔共産主義〕を基本とするイデオロギーが日本国中に充満していた。

「右翼」団体においても、おおむね自由主義のほうがかたがたく〔社会主義〕より以上に嫌われていた。それは、「右翼」の多くが、「日本主義」「国家主義」で味付けしているが共産主義イデオロギーに立脚していたからである。

私有制と利潤追求の市場経済制を絶対とする英米系の個人主義思想のほうがかたがたく共産主義より害毒が甚だしいとみなすのが一般的であった。だから、排英・親

ソが、「右翼」団体の**多数**であった〔拙著『山本五十六の大罪』、311～312 頁参照のこと〕。

「右翼」**イデオログ**の巨魁とみなされる**北一輝**すら、自分自身を「**純正社会主義者**」と信じていたとおり、北（一輝）は**幸徳秋水**系の純粋な**共産主義者**〔**マルクス・レーニン主義者**〕であった。**治安維持法**の存在の故に、激した**天皇制廃止論者**でありながら、〔拙著『皇統断絶』ビジネス社、219～222 頁、参照のこと〕、天皇制廃止を口にしていないが、内心ではそう考えており〔天皇尊重姿勢を偽装〕、**北一輝**が**日本共産党**と相違するのはただ一点、**ソ連**を「**祖国**」とせず日本を“**祖国**”としていたことだけだった。当時もこの事実は知られており、だから『日本改造法案大綱』が日本の共産化に貢献するものとして、**共産主義者**の牙城で**共産革命**を使命としていた**改造社**から出版された〔1923 年 5 月〕。

北（一輝）の『日本改造法案大綱』でも、次のごとく過激なる**共産革命**が主張されている。

（北一輝『日本改造法案大綱』）

華族制の廃止／天皇財産の国家下附〔めしあげ〕／私有財産限度〔一家百万円を上限、違反者の厳罰〕／私有地限度〔一家時価額十万円を上限〕／都市の土地市有制〔私有の完全廃止〕／私人生産業〔=私企業〕限度〔資本金壱千万

円を上限、すなわち大企業の全面国有化] /。

北一輝の、私有と自由市場へのこれほどの憎悪と否定、それは日本共産党そのものだし、戦後の社会党左派〔社会主義協会〕の極左イデオロギーと寸分も違わない。

江戸時代に国学が本居宣長らによって確立するが、それが漢学〔儒学〕から反転して直線的に誕生したことに似て、「国家主義」の衣を着る北一輝らの「右翼」は、ロシア共産党の嫡流血族の親族であった。

戦前日本で日本共産党からの転向人士のうち、かなりのものが直ちに「極右」的行動をとれたのは、「右翼」「極右」と共産党とは同族だったからである。

当時も、東京地方裁判所所長の平田勲などは、「右翼中の最右翼と称すべきものは日本共産党より転向したる一派なり」と正しく指摘している。

〔5〕-3 大川周明を熱烈支援した朝日新聞

北一輝とならぶ「右翼」イデオログと分類されている大川^{しゅうめい}周明も同様に、日本社会主義研究所を設立したように、自らを〔日本における社会主義者の先駆者である〕幸徳秋水の後継とも考える過激な社会主義者〔共産主義者〕であった。

日本の社会主義化にレーニンの暴力革命の方法で実行することを画策し続け

た人物である。

だから、「赤い軍人」と〔彼らの洗脳もかねて〕交際し、親ソ一辺倒の共産主義者の橋本欣五郎〔参謀本部ロシア班長、中佐〕が中心の^{さくらかい}桜会と共謀しての三月事件〔クーデター未遂、1931年〕を計画したし、1932年5月15日の5・15事件ではこれに深く関与していた〔禁錮五年〕。

大川周明の目的は、英米系自由主義の政治体制の政党政治〔議会制民主シー〕つぶしであり、市場経済システムつぶしであり、軍部そのものをロシア共産党（ボルシェヴィキ）と化して日本を一党独裁の社会主義国家に変革することであった。

日本共産党との相異は、日本という国家を重視して、ロシア共産党の支配を受けるとやロシア共産党に奉仕することを拒否するという一点だけしかなかった。「ボーダーレスの共産主義者」でなく「ボーダーフルな共産主義者」であった。

だが、5・15事件から10年を経ると、「右翼」や革新軍人におけるこのボーダーフルの粹組死守の姿勢は消えて、つまり「国家主義」的な社会主義者たちは、ロシア共産党や中国共産党を“同志”と考える日本共産党に同化していくのである。

ところで、この5・15事件の首相殺害のテロリストたちを無罪にしろ！法を

枉げろ！法なんか何だ！と、“**コミュニストの巣窟**”**朝日新聞**〔東京〕が社をあげて連日、文字通りの**一面トップの大キャンペーン**を展開したことを**忘れてはなるまい**。

革新〔左翼〕**将校**は**純真**で**至誠の士**である、などとの**詭弁**をもって**軍法会議**〔軍人を裁く特別裁判所〕に助命・減刑の嘆願をしようと呼びかけ、次のような大見出しで翌 1933 年の 7 月から 9 月にかけて、「**世論**」を**煽りに煽った**のである。

「止むに止まれぬ**祖国防衛権**行使」〔8 月 22 日付〕

「公益のための違法一点の**私心なし**」〔8 月 23 日付〕

「浅井中尉の**熱弁**に被告・法廷に**泣く** 高須裁判長**唇をかみしむ**」〔9 月 12 日付〕

「**犬養は死所を得た**」〔9 月 14 日付〕

「眠れる我国民を揺り起したもの」〔9 月 15 日付〕

「被告等の**純真さ**と**愛国の熱情**を認む」〔9 月 16 日付〕

「求刑反対で自殺 **一徹**な老伍長」〔9 月 16 日付〕

「退団兵も減刑嘆願 裁判長へ五百通提出」〔9 月 16 日付〕

「**道義**日本の確立 **破壊**活動の**真目的**」〔9 月 21 日付〕

「首をさげて検察官沈黙 論告の補足をせず」〔9 月 21 日付〕

殺人犯に共感するこの**朝日新聞**の煽動・宣伝〔=大衆動員〕によって百万通を超える手紙が陸・海軍の**軍法会議**に寄せられた。

ということは、「**大川周明**---**5・15事件**の『**暗殺犯**』である**革新将校**---**朝日新聞**」の**三者間**に緊密な絆があることになる。戦後の**朝日新聞**の**大川周明批判**は、かつて**熱烈**に支持した**仲間**に対する**変節**であり、**責任転嫁**である。自らを**偽装**するための**朝日一流**の**戦術**である。

帝国陸軍が**公然**と**日本共産党**と**同一の道**を歩むようになった、その始まりは**陸軍省新聞班**が公刊したパンフレット『**国防の本義と其の強化の提唱**』以降であらう。

このパンフレットは1934年10月で、主たる執筆者は**東大**で**マルクス経済学**を学び**熱狂**的な**計画経済**の狂信者となった**池田純友**^{すみとも}〔当時少佐〕であった。

これを清沢^{きよし}冽も「すべての**右翼人**の案がそうであるように、それは**恐ろしく左翼主義的公式論**であって・・・」〔傍点著者〕と評し、やはり「**右翼 = 社会主義者**」と**正しく理解**している。

この陸軍パンフレットに対して**民政党**も**政友会**も軍の任務からの逸脱だと非難したが、**無産政党**の**社会主義者**たちはおしなべてこれに**熱狂**した。

社会大衆党の**麻生久**などは「日本の国情においては、**資本主義打倒**の**社会改革**〔= **社会主義革命**のこと〕において、**軍隊**と**無産階級**の**合理的結合**を**必要**な

らしめている」と、この陸軍パンフレットが、軍部による「プロレタリアート革命」の教科書となっていくのを見抜き、はしゃぐように歓迎した。

この陸軍パンフレットは、「国防」という二文字を「共産党的独裁体制」と同義語とする巧妙な「新語法」〔ジョージ・オーウェル〕を中核として、そのレトリックを展開している。

つまり、この「国防」は国家を外国からの侵略から守るという一般通念上の“国家の防衛”のことを意味していない。「国家の全活力を総合統制する」こと、つまりスターリン型の共産党的独裁体制にすることだと明快に定義している。

つまり、新造語の四文字「国防国家」とは、「ソ連型共産党的独裁体制の国家」のことにほかならない。

〔一般通念上の〕“国防”の職責に燃える若い軍人は、若いが故に読解力が未熟だから、麻薬語「国防」「国防国家」を表面上で読むため心酔するしかなく、次第に洗脳されていくことになる。

実際にも十年を経てこのときの若い士官が陸軍省や参謀本部の中堅になったとき、陸軍の本格的な共産化が生じている。

前にも述べたが、敗戦で陸軍が解体されたあと、多くのエリート将校が日本共産党へ入党したし、〔日本共産革命のための〕ソ連工作員となった。

たとえば、1954年に米国に亡命したラストヴォロフ KGB 中佐〔偽装肩書は

在日ソ連大使館の二等書記官〕が直接使っていた**日本人スパイ**のなかの**陸士・陸大卒**の陸軍のエリート**志位正二**〔終戦時は関東軍第三方面軍情報参謀、少佐〕らがいる。

後述する**朝枝**も、ラストヴォロフ亡命と同時に警視庁に**自首**しており、これにかかわっていよう。なお、**日本共産党委員長**の**志位和夫**は、この**志位少佐**の**甥**である。

ラストヴォロフの米国での証言のなかに、「**11名**の厳格にチェックされた**共産主義者の軍人**を教育した」があり、**瀬島龍三**、**朝枝繁春**、**種村佐孝**〔参謀本部戦争指導班長、戦後は公然の**共産黨員**〕、**志位正二**らの名が判明している。

共産革命のためのこれら**日本人トップ工作員**に対する訓練は、モンゴルのウランバートルにあった「**第 7006 俘虜収容所**」という偽装看板の特殊学校で実施された。

この**11名**のなかの**1名**である**瀬島（龍三）**は陸士2番・陸大首席の**大秀才**であり、総合商社の**伊藤忠商事**や**中曽根〔康弘〕**総理の**ブレーン**を勤め「**名参謀**」の**神話**につつまれているが、**KGB**の**工作員**として「**祖国**」**ソ連**に生涯を捧げた、^{あだな}綽名どおりの「**赤いナポレオン**」「**クレムリンの犬**」であった。

瀬島（龍三）は、1947年1月末ごろから1950年4月まで自分がいた収容所はどの収容所であるというべきであるのに、沈黙に徹してけっして語らない。

1948年7月以降については他人の証言である程度判明しているが、47年1月からそれまでの1年半のあいだはまったく闇につつまれた空白となっている。この期間は「第7006 俘虜収容所」で **KGB 工作員** としての特訓を受けていた。

また、**瀬島** は、東京裁判で **松村知勝**〔少将〕とともに **ソ連側証人** として出廷した〔1946年10月〕。

共産主義者 でないかぎり、**ソ連** は証人に採用することを **断じてしない** から、これも **瀬島** が **共産主義者** であることを示す **端的な証拠** の一つである。

このように、**帝国陸軍のエリート将校群の中核** は、1940年代に入るや **共産主義者の巣窟** となりつつあったし、戦後日本の **共産革命の戦士たち**〔人材〕を **東大・京大** などとともに輩出した **一大供給源** であった。

1931年から1945年にかけての「**軍国主義**」、それは **陸軍主導** による日本の **社会主義〔共産主義〕化** を「**上からの革命**」によってなしとげようとしてきた **日本型「共産革命**」の表象にすぎない。

表層 の「**軍国主義**」現象の、その **基層** は、「〔共産党や社会党でなく〕 **陸軍** を **独裁党** とする日本の **共産主義革命運動**」であった。

日本の「**軍国主義**」が、日本の「**共産主義 革命運動**」を生んだ **一現象** であるならば、日本の **大東亜戦争** とは、**社会主義〔共産主義〕イデオロギー** が **生んだ**

戦争であり、もし大東亜戦争を**非難**するのであれば、その母胎となった、戦前日本の**社会主義**〔**共産主義**〕**革命熱**を**まず非難すべき**であろう。

戦後の日本において、「大東亜戦争 = 軍国主義」という**公式**が**宣伝**されたのは、**共産主義**を**聖化**して**共産主義革命**を大東亜戦争批判〔非難〕の**外に避難**させておくための**レトリック**〔**詭弁**〕あった。

“大東亜戦争 = **日本と東アジアの共産主義化**”という**歴史の真実**を**隠す**、**情報操作**の一つであった。

〔以上、出典：中川八洋『近衛文麿の戦争責任』、PHP 研究所、186～200 頁〕

（参考：戦前日本の「**右翼**」**思想**について、中川八洋『山本五十六の大罪』、弓立社、311～313 頁より引用。）

戦前の日本では、日本特有の奇妙な**政治団体**の存在は、無視できないほど力があつた。いわゆる「**右翼**」である。戦前の**右翼**を正確に理解できないならば、**大東亜戦争の真実**に辿りつくことは**できない**。

戦前の「**右翼**」は、「**国家社会主義**」の「**運動団体**」と目され、そう**呼称**された。正鵠を射た、うまいレッテルである。

「**右翼**」運動団体の多くは、「**社会主義**」を**信仰**していて、必ずと言っていいくらい「**資本主義からの脱却**」とか、「**統制経済・計画経済化**への日本改造」

とかを標榜した。「右翼」は反・資本主義を是とする「左翼」イデオロギーの団体であった。経済体制の選択に関して、「右翼」と共産党・労農派とを峻別する垣根は存在しなかった。ただ、国家に関して、国家否定で「世界共産化」の共産主義者とは対極的に国家（国境）重視のために、その社会主義は国家（民族）的であった。

そのほか、「反・議会主義」にしても「反・政党主義」にしても戦前日本の右翼は、共産党や労農派と差異がなかった。

1933年に、内務省警保局がまとめた資料その他によれば、各団体の「反・資本主義宣言」は、次の通り〔注 11〕である。

神武会「私利を主とし民福を従とする資本主義経済の搾取を排除し」

日協「産業大権の確立により資本主義の打倒を期す」

新日本国民同盟「反資本主義統制経済の実現を期す」

日本国家社会党「合法的手段により資本主義機構を打破し、国家統制経済の実現・・・を期す」

尊王急進党「資本主義もまた日本主義にあらず故に・・・反対す」

愛国勤労党「搾取なき国家の建設を期す」「産業大権の確立によりて全産業の国家的統制を期す」

日本社会主義研究所「資本主義の無政府経済制をもってわが国民の生活を

圧殺するものと認め・・・これが撤廃を期す」「生産手段の国有および国家による集中的計画経済の施行」

日本共産党「生産者立国の**国家統制経済政策確立**」

建国会「産業の**国家統制**」

日本ファシズム連盟「**国家統制**に拠る**経済形態の確立**を期す」

皇道会「**資本主義経済機構を改廃し、国家統制経済の実現**を期す」

急進愛国党「非国家的**資本主義の徹底的改革**・・・**搾取なき国家の確立**を期す」

この各団体についての詳細は、木下半治の書を参照のこと〔注 12〕

〔注 11：内務省警保局『国家主義運動の概要』、原書房、541～544 頁。

原著 1933 年。〕

〔注 12：木下半治『日本国家主義運動史』、慶応書房、1939 年。このほか、1934 年に検事の馬場義続がまとめた『わが国における最近の国家主義ないし国家社会主義運動について』も参考になる。〕

(以上、**出典：中川八洋**『山本五十六の大罪』、弓立社、311～313 頁)

大東亜戦争(日支戦争・対英米戦争の 8 年戦争)の真実 第 6 回 補足回(完)

平成 26 年 2 月 5 日 バークを信奉する保守主義者

